

タイフーン / TYPHOON

2006(平成18)年4月16日鑑賞(国際シネマ)

★★★★



監督・脚本=クァク・キョンテク/出演=チャン・ドンゴン/イ・ジョンジェ/イ・ミヨン/キム・ガブス/デイヴィッド リー マキニス/シン・ソンイル (東映配給/2005年韓国映画/125分)

第1章

あなたは
何本見た？

……「南北分断」は韓国映画特有の重たいテーマ。南への亡命に裏切られ、姉と生き別れになった弟は、今や海賊となって、アメリカ船から衛星誘導装置を強奪したが……？ その逮捕に向かう若き海軍士官の任務と、姉弟の再会は……？ そして「タイフーン作戦」とは一体ナニ……？ 台湾、タイ、マレーシア、ロシアと広がる舞台の中で、くり広げられる人間味あふれる物語と、多少陳腐ながらもスケール豊かな物語に脱帽……。もっとも、「○○さん、ステキ」だけの韓流おばちゃまファンには、ちょっと難しすぎるかも……？

この映画の2つの側面——その1

この映画は『シュリ』(99年)、『JSA』(00年)、『ブラザーフッド』(04年)、あるいは『送還日記』(03年)などを貫く韓国映画特有の南北朝鮮分断問題をテーマとしたもの。

その中でも「脱北者」をテーマとしたものであるうえ、一度は家族そろって脱北に成功したと思った途端、父母が殺され、残された幼い姉弟がいかに生きていくのかという極限的な状況設定をした映画。

「人間の肉を食らったことがあるか？ 木の根をかじったことあるか？」というセリフは、概念的には理解できても、そんな極限的状态は想像すらできないのが今どきの日本人。せいぜいテレビの報道番組で時々放映されている、今なお中国に越境した脱北者たちが、国境付近の山奥で極限状態の中で生活している様子

を観るのが関の山……。この映画の側面の1つは、この脱北者の存在とそのあり方を真正面から問うもの。そのことを観客はよく自覚し、その方面への関心を強めるべきだ。

この映画の2つの側面——その2

もっとも、そんな固いことばかり言って映画をつくっても、誰も観てくれなければ意味がない。映画はあくまで楽しむための芸術なのだから。そこでクァク・キョンテク監督が狙ったのは、核ミサイル用の「衛星誘導装置」の強奪、そしてこの衛星誘導装置とロシアの核廃棄物30トンとの交換という、いかにも実現可能性のある(?) 恐ろしいストーリー。

しかもクァク・キョンテク監督は観客に対してこのストーリーをいかにももっともらしく危機感をもたせるために、ロシアはもちろん、米国の潜水艦まで登場させた……。

その前提となるのは、米国がアメリカ船籍の民間貨物船で、衛星誘導装置を台湾から沖縄に秘かに輸送していたのは、中国・ロシア同盟に対抗するためには、日本に核ミサイルを配置することが不可欠と考えたアメリカの世界戦略の一環だというわけだ。考えてみればこれはたしかにありうること。すると、衛星誘導装置と交換された30トンの核廃棄物は、一体何のために使われるもの……？

そういう恐さとスリルを楽しむのがこの映画のもう1つの側面。そして、そのためにも当然、かなりの勉強が必要だよ……。

誰にそんなことができるの……？

ところで、衛星誘導装置の強奪と30トンの核廃棄物の活用などという「大それたこと」を発想し、それを実行に移すことができる人物って一体誰？ 誰にそんなことができるの……？

そう考えた場合、現実にはその可能性があるのは、私にはロシアのKGB あがりの、マフィアか、イスラム原理主義勢力くらいしか考えられないが、それではあまりにも生々しくなりすぎ……？

そこで考え出されたのが、現実には絶対にありえない(?) 「脱北者あがりの

海賊」というキャラクター。もちろん、これだけの大仕事をやる海賊だから、そのポスは、仲間の中で強大なリーダーシップをもっていることはもちろん、対外的にも顔がきき、抜群の行動力を持っている大物でなければならない。それがダイエットした精悍なマスクで登場するチャン・ドンゴン扮する海賊のポス、シンというキャラクターだ。

シンたち海賊集団のアジトは、タイ・マレーシア国境付近。なるほど、これはいい発想。そう聞けば、私たち団塊の世代のおじさんたちは、『怪傑ハリマオ』を思い出すはず……？

彼らはここを拠点として力をたくわえ、ついに今日は、台湾の北東海域でアメリカ船籍の民間貨物船を攻撃。ここから、壮大な物語のスタートだ。

カンの任務は？

海軍士官学校を次席で卒業した海軍大尉がカン・セジョン（イ・ジョンジェ）。このカン・セジョンはえらくカッコいい役だから、見方によってはイ・ジョンジェはチャン・ドンゴンを喰ってしまっている感じさえも……？

彼は衛星誘導装置奪取のため国家情報院へ配置換えとなり、シンを追ってタイやロシアを駆け回ること……。

軍人の父親も殉職したらしいが、彼の軍人としての忠誠心と能力はピカー。ところが、衛星誘導装置が既にロシアの手に渡ったことを知った国家情報院から、衛星誘導装置奪取作戦の終了と、シンとシンの姉ミョンジュ（イ・ミヨン）の抹殺命令を受けたカンは、国家への忠誠心（＝命令への絶対服従）に揺らぎはないものの、目の前にいるシンを撃つことができなかった。

そんな彼がシンの最後の大バクチである「タイフーン作戦」を知った時にとったのは、同期の仲間たちを結集しての非公式のある作戦。軍隊組織である以上、いくら忠誠心にもとづくものであっても、こんな勝手な行動が許されないことは当然だが、あえてそんな行動に踏み切ったカンの心情とは……？

姉弟の再会は？

シンが幼い時に別れたミョンジュが活着していることを知ったのは、カンから

「姉と会わせるかわりに衛星誘導装置を引き渡せ」という申し出を聞いたため。ミョンジュはロシアのウラジオストックでカンの保護を受けたが、長い間ハルビンで労働者相手に売春をしていた彼女は、既に脳腫瘍のために視力を失いかげ、心臓も弱っている状態だった。

そんなミョンジュがカンに語った亡命の様子は、何とも悲惨なもので、胸を打たれること必至。さあ、シンはカンの申し出を信用して取引に応じ、姉弟の涙の再会はなるのだろうか……？

「タイフーン作戦」とは？

ふつうクライマックスシーンはラストに持ってくるものだが、それはこの映画でも同じで、『タイフーン』というタイトルがピッタリのクライマックスシーンは迫力満点。

ところで、シンが名付けた「タイフーン作戦」とは、一体ナニ……？

それは船の中に隠した、核物質を積んだ空中散布用の風船を「台風の目」の中から放出すること。すると、どうなるのか……？

強風に乗ったこれらの風船は、南北を問わず朝鮮半島の上に。ヘタをすれば、予想を超えて日本列島まで……？ そんなヤケッパチな行動をシンがとろうとしたのはなぜ……？ そしてそれを阻止するために、カンや韓国軍そしてアメリカ軍がとった手段とは……？

現実の日米、韓米の軍事条約上のシステムからは多少陳腐な設定だと思われるものの、アメリカ潜水艦からの魚雷発射を含むクライマックスシーンは迫力のあるもの……。さて、その結末は……？

東南アジアの地理の理解が不可欠

この映画のパンフレットの内容は豊富だから、是非購入してもらいたいもの。中でも「シンの計画」と「シンのルート」の学習が不可欠。スクリーン上では、場面は大きく

- ①台湾・基隆（キールン）港から北東220km地点 貨物船強奪
- ②タイ・マレーシア国境付近 シンの海賊集団のアジト

- ③韓国・釜山（プサン） パク・ワンシク殺害
- ④ロシア・ウラジオストック 衛星誘導装置と核廃棄物を交換、姉と再会
- ⑤タイ・マレーシア国境付近 シンの海賊集団のアジト
- ⑥東シナ海海上 タイフーン作戦決行

と変わっていくが、これをどの程度のリアリティを持って実感できるかは、ひとえに観客1人1人の知識と学習意欲にかかっている。「チャン・ドンゴンさん、すてき！」というだけのおばちゃんの発想でこの映画を観ても、サッパリわからないから、要注意……？

タイのパタヤーとは？

パンフレットにある鈴木貴之氏の「『タイフーン』現場修行」には、2005年1月15日にタイのパタヤー近郊で撮影したことが書かれてある。シンの本拠地である村のシーンの撮影を、タイのリゾート地として有名なクラブ付近にある島を中心として、2004年12月24日に終えた後、ロケ隊が次の撮影地パタヤーへ移動したのは12月27日のこと。

そして、何と、スマトラ沖地震が発生したのは、その移動前日の12月26日。もし、クラブ島での撮影が数日間長引いていたら……？

タイでは、バンコクの北にあるアユタヤ遺跡やタイ北部のスコタイ遺跡が有名だし、南端のプーケット島も有名。しかしそれ以外にも、タイ南部すなわち海に面した地方で有名なのが、「東洋のリビエラと呼ばれるビーチリゾート」のパタヤー。私が2002年4月にはじめて友人の商社マンに案内されて、タイを「大名旅行」した時に訪れたすばらしい場所だ。

それはともかく、このパタヤーの撮影では、韓国の「太極旗」を掲げた軍艦を登場させ、さらに韓国軍のヘリコプターに化けたタイ空軍機を登場させていたから、映画における観客の「化かし方」は、何とも恐ろしいもの……？

2006(平成18)年4月20日記